

次の課題文を読んで設問に答えなさい。

このたびの東北の大災害(※注1)で、もっとも意外だったのは、これで日本という国の進路が変わるだろうとか、幕末以来の国難で日本は立ち直るのが難しいだろうといった言説が、メディアに溢れたことである。これは私が鈍感なのだといえばそれまでだが、その自分の鈍感について、この際思いを新たにしないわけにはいかなかった。

自分には一種の無感動が身についているのではないかとも思った。だとすれば、それは少年の日、敗戦後異郷で苛酷な生活を営め、焼け野原の日本に無一物で帰国した経験のせいに違いない。

姉と二人で最後の引揚船ひきあげせんに乗る前、私は発熱して、当時間借りしていた友人の家の二階にひとり寝ていた。父と母は先に帰国していたし、大連(※注2)にはもう残っている日本人はほとんどいなかった。窓から隣のビルの壁が見えた。陽はすでにかげつて、壁は冷たい灰色である。これが終末の風景なのだと考えた。ちょうどエレンブルグの『トラストD E』(※注3)を読んだばかりで、主人公が飛行機で廃墟はいきよと化したヨーロッパに降り立った情景が思い合わされた。私は一六歳だった。

でも、それは病気で心が弱っていたからで、石炭がなくてストーブも焚けない氷点下の生活を送りながら、ひとつもつらいと感じた記憶はない。大日本帝国が滅んで、心はうきうきしていた。

熊本へ引き揚げてくると、街中には焼け跡がいたるところに残っていたが、人びとは活気に溢れていた。両親は頼りにしていた親戚が焼け出され、お寺に寄寓(※注4)していたので、そこに転がりこんでいた。そこに姉と私がさらに転がりこんで、六畳一間に七人で暮らした。あとで姉の勤め先の職員寮へ移ったが、それはバラック兵舎の内部をベニヤ板で仕切った一間きりで、戦時中焼夷弾(※注5)がひつかからぬように天井板はとりはずされていた。隣とは話が筒抜けである。水道はなく、数十メートル離れたところにある蛇口までバケツで水を汲みに行った。そういうところに、私たちは昭和三五年、つまり戦後一五年になるまで暮らした。不便だともつらいとも思わなかった。あとでつれあい(※注6)になる人が遊びに来ても、こんなところに住んでと恥じる思いはなかった。後年母は、あの職員寮のところが一番楽しかったと述懐した。

私は何が言いたいのだろうか。人間が文明の進歩、具体的に言えば経済の成長や科学技術の発展によって、安全で便利で快適な暮らしができるようになったのはよいことである。政府や自治体が災難や困窮に見舞われた住民に対して、ひと昔よりずっと保護の責任を果たそうとしているのも、同様によいことである。だが、経済成長には当然限度があるべきだし、科学は夢物語ではなく、人間に実現もしくは制御不可能なことを明らかにするものであるはずだ。

いや、そんなことよりも、人間がこの地球上で生存するのは、災害や疫病とつねに共存することを意味するのであって、そういうものを排除した絶対安全な人工カプセルなど不可能だし、万一可能だとしても、そんなカプセルの中で生存するのは、人間が人間でなくなることなのだという厳然たる事実を、この際思い出すことが必要なのだ。だからパスカルは人間はかよわい葦わづら(※注7)だと言った。かよわい葦だとしたら、一陣の烈風にも折れるだろう。だがその葦は地球の生み出すあらゆるゆたかさの可能性を感受できるのだ。人間の生が稔りみち(※注8)あるものだとすれば、いつ悲惨に見舞われても不思議ではない生存条件とひき換えにそうであるのだ。

人間が安全・便利・快適な生活を求めるのは当然である。物質的幸福を求めずに精神的幸福を求めよなどは、生活の何たるかを知らぬ者の言うことである。上手にいれられた一杯の上等な紅茶は、それがそのまま精神的な幸福であるからだ。ただ、私たちに必要なのは、安全で心地よい生活など、自然の災害や人間自身を作り出す災禍によつて、いつ失われてもこれまた当然だという常識なのだ。人間はもともとそんなに脆弱ぜいじやくなものではない。カプセルめいた人工的文化環境に保護されなくても、よろこびをもって生きてゆける生きものなのだ。人工の災禍という点でも、人間の知恵でそれから完全に免れるという訳にはいかぬと私は思っている。人間はそれほどかきこい生きものではない。争いつつ非命に倒れる(※注9)。それでもつねに希望はあるのだと思っている。

このたびの災害で、日本という国の進路は見直されるのだという。よきに計らってくれ。私には日本とか日本人という発想はない。それは指導者の理念で、私は指導者ではない。私にはただ身の廻りまわりの世の中と、そこで生きる人びとがあるばかりだ。その世の中が一種のクライマックス(極相)に達していて、転換がのぞまれるとは、むしろ私も感じている。だがそれは、いわゆる3・11がやって来ようと来まいと、そうだったのである。しかしこの転換は容易な課題ではない。それについては今のところ、人びとの合意も難しい。残余はすべて当座の政策の問題である。災害からの復興の仕方もそうである。口を出そうとも思わないし、またその能力もない。

(渡辺京二「かよわき葦」による。原文を改めた箇所がある)

※注1 このたびの東北の大災害……二〇一一年三月一日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波、及びその後の余震により引き起こされた大規模地震災害を指す。「3・11」とよばれることもある。

※注2 大連……中国遼寧省の工業・港湾都市。一八九八年からロシアが租借していたが、一九〇五年のポーツマス条約によって日本が租借することとなった。

※注3 エレンブルグの『トラストDE』……エレンブルグは、旧ソビエト社会主義共和国連邦の作家（二八九一年～一九六七年）。『トラストDE』は、エレンブルグが第一次世界大戦直後の一九二三年に発表した作品で、「ヨーロッパ滅亡史」という副題がつけられており、主人公がヨーロッパを破壊し尽くすというストーリー。

※注4 寄寓……一時的によその家に身をよせて世話になること。また、仮の住まい。

※注5 焼夷弾……発火性の薬剤を充填した爆弾・砲弾・銃弾。攻撃対象を焼き払うために使用する。

※注6 つれあい……配偶者のこと。

※注7 葦……ヨシのこと。イネ科ヨシ属の多年草。パスカルは、『パンセ』と後に呼ばれる書き綴ったノートの中で、人間を「考える葦」と呼んだ。

※注8 稔り……「実り」と同義。

※注9 非命に倒れる……天命でなく、思いがけない災難で死ぬこと。

設問

なぜ作者は傍線部のように考えたのか、また作者の考えに対してあなたはどのように考えるか、あわせて一〇〇〇字以内で論じなさい。